

活動団体について	
活動団体名	米沢市
所在地	山形県米沢市金池五丁目 2 番 25 号
<input type="checkbox"/> 主な活動地域が、過疎地域自立促進特別措置法（平成 12 年法律第 15 号）に基づく過疎地域（第 2 条第 1 項に規定する過疎地域）に該当（該当する場合には <input checked="" type="checkbox"/> を入れてください。）	
設立	年 月 日 ※地方公共団体が申請する場合は不要。
役員等	※地方公共団体が申請する場合は不要。
活動団体の目的	※地方公共団体が申請する場合は不要。
1. 本事業への応募理由	
(1) 地域の現状と課題	<p><地域の現状></p> <p>1 地理的条件「山形県の南の玄関口」</p> <p>本市は、山形県の母なる川「最上川」の源である吾妻連峰の裾野に広がる米沢盆地にある。山形新幹線により東京と約 2 時間で結ばれているほか、2017 年、東北中央自動車道の開通（米沢～福島間）で高速交通網につながるなど、山形県の南の玄関口としての役割を担っている。また、県南の置賜地域（3 市 5 町）の中核であり、2018 年度に形成した置賜定住自立圏の中心市でもある。総面積は 548.51 km² と広大で、森林が 77% を占める自然豊かな地域であるとともに、全域が特別豪雪地帯に指定される雪深い地域でもある。</p>
	<p>2 歴史背景「江戸時代に SDGs 政策を推進した米沢藩主・上杉鷹山の町」</p> <p>本市は、伊達氏・上杉氏が本拠としたことにより、両氏の城下町として栄えた。特に、1601 年、上杉景勝が米沢に入封して以後、明治維新を迎えるまでの間、一貫して上杉氏の城下町であったことから、市内には上杉家所縁の史跡や文化財が数多く残されている。</p> <p>また、米沢藩 9 代藩主の上杉鷹山は、その生涯をかけて財政難に苦しむ藩政改革に取り組み成功に導いたことで知られ、鷹山の行った農村復興と殖産興業、水害・飢饉・火事等の災害に備えたリスク管理等の取組は、まさに現在の SDGs につながる「持続可能な地域づくり」の先駆けと言われている。</p> <p>山に囲まれた地形で、たんぱく質が不足がちになる中、健康滋養食である米沢鯉を取り寄せ養殖を進めたほか、食糧不足に陥った際に節約するための代用食になるウコギなどの「かてもの※」の研究をした。市内の小中学校には、上杉家の家祖謙信と共に鷹山の肖像画が飾られるなど、子どものころから鷹山に親しみ、その功績について学ぶことで、現在まで「なせばなる」の名言に代表される精神が受け継がれている。</p> <p>さらに、本市と近隣市町からなる置賜地域には、上杉鷹山の時代から、草木塔（4 ページ参照）と呼ばれる石造の塔が数多く建立されており、現存する最古のものが本市に存在する。これは、自然の木や草の命を大切に想い、その命を供養するためのものであると言われ、この独自の自然観は、環境問題が深刻化する昨今において注目を集めている。</p>



※かてものとは？

主食である穀物とともに炊き合わせ、食糧不足に陥った際に節約するための代用食になる食物をいう。

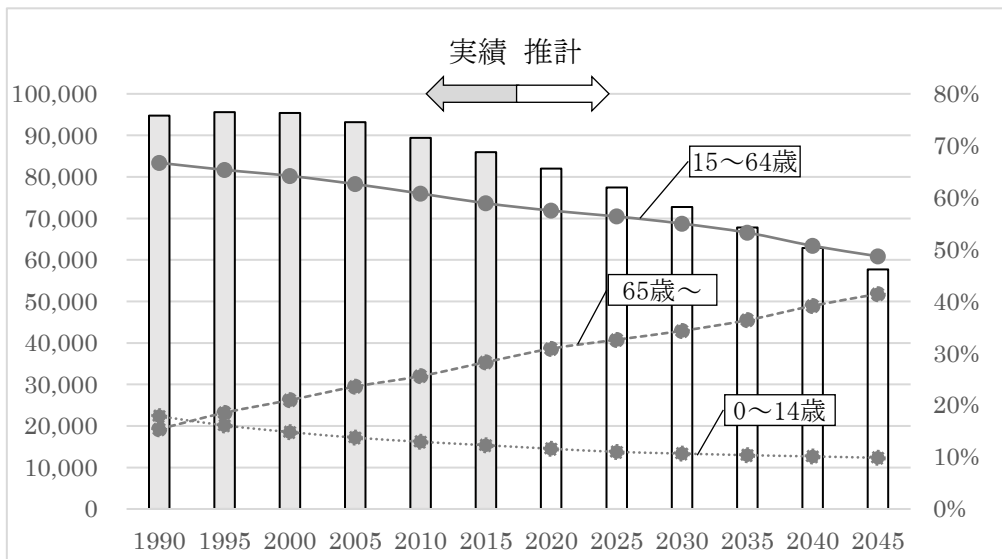
3 人口動態「置賜地域の中心として8万人を擁する中核都市」

本市の人口は、1995年の95,592人（国勢調査）をピークに減少し続けており、2020年10月1日現在の推計人口は81,021人となっている。

2009～2018年の間の人口動態としては、死亡者数が出生数を上回る自然減、転出者数が転入者数を上回る社会減の状態が続いている状況にあり、国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2030年には72,719人、2040年には62,875人と、更に人口減少が進むことが予測されている。

人口構成については、1995年に年少人口（0～14歳）と老年人口（65歳以上）の割合が逆転して以後、老年人口の割合が増加し続け、2045年には、老年人口の割合が4割を超える推計になっている。

また、生産年齢人口（15～64歳）に関しては、置賜地域の中心都市として本市に高校や大学、産業の集積が見られることから、地域内の他自治体に比べて、その割合は高いものの本市自体の割合は減少し続けている。2015年から2020年までの5年間におけるコーホート別の変化率を見ると、男性では20～24歳、女性では15～19歳と20～24歳で減少の割合が大きい。これは、高校や大学を卒業する年齢層に当たり、進学や就職等に伴う市外流出が、生産年齢人口減少の大きな要因となっていると考えられる。



資料：国勢調査（1990～2015）、国立社会保障・人口問題研究所（2020～）

4 産業構造

「情報通信機械器具等の製造業が集積する『ものづくりのまち』」

2015年の国勢調査結果に基づく本市の産業別就業人口は、第1次産業：3.8%、第2次産業：34.3%、第3次産業：58.9%となっている。

本市は、米沢八幡原中核工業団地を中心として製造業が集積し、東北でも上位の製造品出荷額等を誇る「ものづくりのまち」という側面を有しており、全国平均と比べて第2次産業の従事者数の割合が高いという特徴がある。また、本市は、NECが国内でノートパソコンを製造する唯一の拠点となっている。



米沢八幡原中核工業団地

※本市製造品出荷額等：5,298億円（2018年東北製造品出荷額等順位8位）

5 地域資源

「SDGs を先駆けた米沢藩・上杉家ゆかりの歴史遺産と教育資産」

①豊かな観光資源

「上杉の城下町の歴史と食・自然を生かしたアクティビティ」

「2 歴史背景」でも述べたとおり、本市には米沢城址に建てられた上杉神社を中心に、上杉家所縁の歴史遺産が数多く残されている。また、市の南部に広がる吾妻連峰は、大部分が磐梯朝日国立公園に指定されており、四季折々の雄大な景観を楽しむことができる。特に西吾妻山・天元台高原エリアは、ロープウェイ・リフトや登山道が整備されていることから、グリーン期には登山客が、スノー期においては、良質な雪を求めてスキー客が訪れる人気の山となっている。



さらに、市内には「米沢八湯」として知られる個性豊かな温泉地があり、全国でも数少ない「日本秘湯を守る会」にも6件の宿が登録されているほか、食の面においては、地理的表示（GI）登録された「米沢牛」をはじめとする豊かな食資源を有していることなどから、毎年、数多くの観光客が訪れている。

※本市観光客入込客数：約370万人（令和元年度 山形県観光者数調査）

②高等教育機関の集積

「人口8万人のまちに3つの大学が立地する学園都市・米沢」

本市には、山形大学工学部、山形県立米沢栄養大学、山形県立米沢女子短期大学という3つの高等教育機関が立地し、高度な人材育成、研究・開発機能等の集積が図られている。このような背景から、米沢市まちづくり総合計画（2016～2025年度）では、「ひとが輝き 創造し続ける学園都市・米沢」を本市の将来像に掲げ、学園都市に集積された知識・技術、研究・開発機能、人材等を生かした施策展開を図ることとしている。



また、2018年6月、山形大学と本市を含む5者の共同提案（文部科学省の地域科学技術実証拠点整備事業）により、産業団地である米沢オフィス・アルカディア内に、山形大学有機材料システム事業創出センター（YBSC）を立ち上げた。YBSCでは、山形大学が持つ技術や社会課題解決のための知見を有効に活用し、迅速な事業化と企業への技術移転の促進に貢献するほか、行政や教育機関と連携した地域活性化と雇用促進を図ることにしており、現在、複数のベンチャーが起業し、事業を展開している。



※本市内の大学の学生数合計 3,585人（2020年5月1日現在）

〃 教職員数合計 555人（〃 〃）

<今後取り組む課題>

1 上杉鷹山のSDGsを基本理念としたシビックプライドの醸成

上記の現状「3 人口動態」でも述べたとおり、本市の人口減少は、進学・就職に伴う若年層の人口流出が大きな要因と考えられることから、県外の大学等に進学しても戻ってきたいと思えるような魅力ある地域づくりを行うとともに、市内の学生が米沢で就職したいと思える「働く場」を確保することが課題である。

また、人口流出を防ぐ取組に加えて、交流人口や関係人口の増加に結び付けるためには、市民が「住み続けたい」と思うシビックプライドを醸成していくとともに、地域外から見たときに「訪れてみたい」、「関わってみたい」と思ってもらえる「魅力的で活気にあふれた米沢」のまちづくりを行うことが必要である。

2 現代の藩政改革による健康寿命の延伸

高齢化が進展する中、活気あふれる地域づくりを行うためには、高齢者の社会参画が欠かせない。生きがいを持ち、地域のために活躍できる元気な高齢者が増えることで、高齢者自身が地域の担い手となり、地域コミュニティの活性化につながる好循環が期待できる。

上杉鷹山は、良質な社会の実現に向け、領民の健康を守るため、優れた藩医を長崎や杉田玄白のもとに送り学ばせたほか、オランダの外科医療機器類を購入するなど、米沢藩の医学館「好生堂（こうせいどう）」を充実する取組を行った。そうした地域における健康づくりに学び、市民誰もが健康長寿を全うできる取組を推進する必要がある。

具体的には、元気な高齢者を増やすため、食育の推進や運動等の健康づくり事業、がん等の病気や生活習慣病の早期発見・治療につながる健康診断の受診率向上等、健康寿命の延伸に向けた取組が必要である。特に、本市における特定健診の受診率は県内でも低位（2018年度 35市町村中 30位）にあることから、その向上に向けた取組が必要となっている。

3 自然を敬う“草木塔”を基軸にSDGsを実装する環境のまちづくりの推進

市民が安全・安心で豊かに暮らすためには、快適な生活環境と祖先から受け継いだ豊かな自然環境を維持していくことが必要である。

2020年には、自然に感謝する心を表す草木塔（4ページ参照）発祥の地「米沢」からゼロカーボンシティ宣言を行ったが、他に誇れるその思想を継承した環境保全のまちづくりを進めていくとともに、国内外に向けて草木塔の考えを情報発信し、世界的な課題である温室効果ガス排出量の削減に向けた取組に寄与していく必要がある。

（2）地域循環共生圏の構築を通じて目指したい地域の姿

<基本的な考え方>

◆時代に先駆けてSDGs政策を実践した上杉鷹山の基本精神を現代に生かす

本市の重要課題である人口減少と高齢化は、今後、地域経済を縮小させ、更なる人口減少と少子高齢化につながる悪循環を加速させる恐れがあり、このことは本市のみならず多くの地方都市に共通する課題でもある。

コロナ禍による影響で社会・経済が疲弊している今だからこそ、郷土の先人、上杉鷹山の事績「人材を育て、産業を興し、良質な社会を実現」と、教えである「なせばなる なさねばならぬ 何事も ならぬは人の なさぬなりけり」の基本精神を現代に生かし、持続可能な社会を実現するため、本市の地域資源や特性を活用した環境を軸とするローカルSDGsに市民総参加で取り組んでいく。

<目指したい地域の姿>

◆なせばなる「上杉鷹山流のローカルSDGs」を実現する

本市及び周辺地域は、南部、東部が広い山地に囲まれた米沢盆地にあり、四季の変化に富み、夏は夏日、真夏日となる日が多く、冬は最深積雪が1mを超える年もある山形県内屈指の豪雪地帯の一つである。こうした風土を土台として、上杉氏の歴史・文化が蓄積し、自然に感謝する心を表す草木塔（※）思想や行屋（※）に見られる山岳信仰等、独自の精神文化が根付いている。改めてこうした自然や歴史・文化的資源を見つめ直し、市民・地域・事業者が一体となって、ゼロカーボンに向けた活動や環境保全意識の普及・啓発等に取組み、「なせばなる『上杉鷹山流のローカルSDGs』」を実現する。

※草木塔とは？

草木塔は、仏教思想に基づき人間の営みのために伐採された草木に対して感謝し、供養するために造られた塔で、「草木塔」「草木供養塔」という碑文が刻まれ、ほとんどが採石された状態のままの自然石である。上杉鷹山の時代に造られたものが最古



塩地平の草木塔

(1780年、塩地平の草木塔)と伝えられており、これは、学問(儒学)による人材育成を大きな柱として掲げた成果として、自然への畏敬や感謝の念が人民に広く浸透したことで、造られ始めたものと考えられる。近年「自然との共生」という観点で改めて注目されるようになり、草木塔の精神に共感する人々によって、全国各地や海外にも新たな草木塔が建立されている。

※行屋(ぎょうや)とは?

米沢盆地を中心とする置賜地方一帯では、数え年の13~15歳の男子が飯豊山に登拝することで一人前と認められる習俗が大正時代までみられた。この、登拝前にお籠もりして精進潔斎を行うための施設が行屋であり、本市には、国指定重要有形民俗文化財が残っている。



行屋(国の重要有形民俗文化財)

2. 活動内容

(1) 活用したい(している)地域資源及び実現したい事業

【地域資源】

家畜排せつ物資源、森林資源、歴史資源(草木塔)、里山資源

【実現したい事業】

1 家畜排せつ物資源の活用

「ブランド牛・米沢牛の里で実践する地域循環エネルギーシステムの構築」

①地域資源の活用

「チャールズ・ヘンリー・ダラスが始まりの米沢牛」



上杉鷹山が人材育成のために設立した藩校「興譲館」。明治4~8年までの間、興譲館中学で教鞭を執ったチャールズ・ヘンリー・ダラス氏が故郷を懐かしんで四つ足の動物は食べないとされた米沢の地で牛肉を食べたのが食用としての米沢牛の始まりである。

本市の現在の畜産業は、肉用牛だけではなく酪農も盛んであり、畜産農家において乳牛が約2,600頭、肉用牛は約2,300頭、豚が約4,100頭飼養されている。これらの家畜排せつ物については、そのほとんどが堆肥として利用されてきているが、その利用を望む農家でも、情報不足、コストや労力の問題等により十分に利用が進んでいないほか、排せつ物の環境に配慮した適正な処理も課題となっている。このため、排せつ物の堆肥としての利用促進に加え、エネルギー源としてバイオマスの総合的な利活用を促進し、地域循環エネルギーシステムを構築する。

②経済性、持続可能性の確保、実現可能性

「GI米沢牛の里を環境保全でGI(Grade1)に」

本市では、地理的表示(GI)に登録された「米沢牛」の更なる銘柄高揚のため、生産規模拡大と地域内一貫生産体制の確立(繁殖雌牛400頭)を目指して振興を図っているほか、本市の酪農経営体の一つは県内最大規模(乳牛1,600頭)であり、更なる規模拡大を見込んでいることから、今後も多くの家畜排せつ物の発生が見込まれている。



こうした中、民間事業者が新たに酪農による排せつ物を燃料源とするメタン発酵バイオガス発電プラントを立ち上げ、2020年度から稼働させており、将来は地域内の米沢牛の排せつ物の活用も視野に入れている。この好事例であるバイオマス利活用の取組を、今後、米沢牛の生産地である米沢市・置賜地域内に拡大させていくためには、畜産農家の理解も必要だが、施設整備に一定の投資が必要となることから、国・県・市等の補助支援により実現性が左右されると考えている。また、地域ぐるみで有機資源を循環させながら農産物を生産する営みは、地力を維持し、持続性が高い理想的な農業体系につながるとともに、

米沢牛等の畜産品を有機野菜とセット（すき焼き・焼き肉・芋煮セットなど）にし、都内の県アンテナショップやインターネットで販売するなど、新しいSDGsビジネスが生まれる可能性があると考えている。

③他地域への波及効果

「畜産環境モデル地域『置賜』を実現する」

隣接する飯豊町でも、2020年に民間企業1社がバイオガス発電所を整備し、米沢牛等の畜舎からパイプラインで集めた排せつ物を発酵させて発電を開始した。米沢牛は出荷頭数が少ないという課題から、置賜地域全体で協力し米沢牛の増頭に取り組んでいるので、米沢牛振興と環境保全（臭気公害等）を両立する環境にやさしい畜産環境モデル構築についても、同様に連携して取り組んでいけると考えている。

2 森林資源の活用 その1

「米沢牛等の焼き肉に最適な『やまが炭（やまがたん）』の振興」

①地域資源の活用

「暑くて寒い米沢の気候風土で育った高密度の「ナラの木」を使用」

2020年、「米沢市の山との暮らしを伝える遺産群：草木塔群と木流し」が日本林業遺産に認定された。江戸時代、特に上杉鷹山の時代の大規模な薪材流送の歴史を物語る遺構と、山村民の山や草木への想いを物語る石碑群であることが選定理由。

こうした本市林業の歴史を背景に、米沢の名産米沢牛を米沢産の炭を使ってさらに美味しく食べて欲しい、そんな想いから米沢産の木材を活用した炭焼きプロジェクトが始動し、地域の林業者と販売業者が連携し、植林、伐採、炭焼きまでを一貫生産で作る「やまが炭」が誕生した。一般的な黒炭はクヌギの木等を原料としたものが多いが、「やまが炭」は、寒暖差の大きい地元産のナラの木を原料としていることから、少し高価だが火付き良し、火持ち良しの高品質で、米沢牛等良質な素材を焼くのに最適な黒炭である。この炭焼きの取組を更に発展させ、地域林業の一つに育てていきたい。

②経済性、持続可能性の確保、実現可能性

「林業・商業・エンドユーザの三方良し」

「やまが炭」の窯は、本市の自然豊かな里山の中にあり、米沢地方森林組合の意欲あふれる若者がこの窯を守りながら炭づくりを行っているが、現時点では、生産に従事する人材が少なく大量生産はできない。しかし、高品質で希少性が高い商品のため、アウトドア活動、飲食店でのニーズやその評価も高いことから、林業人材の育成に力を入れていくとともに、優れた職人の技術を伝承していくシステム構築により、生産に従事する人が確保され、生産量も安定して更なる林業振興の実現性も高くなると思われる。

また、本市の米沢牛肉まつり（8月）を始め、置賜地域では長井黒べこまつり（6月）、いいで黒べこ祭り（7月）、おぐに牛肉まつり（8月）、川西町の地酒と黒べこまつり（9月）、しらたか米沢牛まつり（11月）が開催されるので、そういった場で「やまが炭」の地産地消を推進していくことも可能である。

③他地域への波及効果

「米沢地域を高品質な木炭の産業集積地に」

米沢地方森林組合は、米沢市、南陽市、高畠町、川西町の広域を所管している組合であることから、他市町の現場でも、高品質な炭焼き産業の集積に向け連携していけるものと考えている。

3 森林資源の活用 その2

「木の独楽の生産量日本一のまちに『子供おもちゃ米モック(ヨネモック)』産業の創出」

①地域資源の活用

「米沢の子供の木育はじめ」

本市には古くから伝わる数多くの伝統工芸品があるが、上杉鷹山により奨励された笹野一刀彫（※）、木地玩具、中でも独楽は日本一の生産量を誇る。こうした伝統工芸の技術を本市の木育教育に生かすため、7 か月児健康教室の際に、乳幼児へ木製品（椅子、お椀、皿、スプーン等）をプレゼントする事業を2020年から森林環境譲与税を活用して開始した。

本市の林業をより多様性と付加価値の高いものとするため、本市の伝統工芸品の歴史背景を生かして、ユニークなデザインの子供おもちゃ（米モック）を製作して販売する地域産業を振興する。

※笹野一刀彫（ささのいっとうぼり）とは？

「お鷹ぼっぼ」に代表される笹野一刀彫は、本市笹野地区に伝わる木彫玩具で、お鷹ぼっぼの「ぼっぼ」とは、アイヌ語で「玩具」という意味。上杉鷹山が、農民の冬期の副業として工芸品の製作を奨励したことに始まり、魔除けや禄高を増す縁起ものとして親しまれてきた。



②経済性、持続可能性の確保、実現可能性

「林業～木のおもちゃ～教育の好循環の輪」

子供おもちゃ（米モック）の材料となるのは、広葉樹（天然林）がメインとなるが、最上川の源流部である置賜地域は、ナラ類等の天然林が多いほか、ブナ林も広がっており、環境面からも木素材生産の最適地である。そして、その麓の里山と関連付けながら、本市が昔から大切にしてきた「森林と人との関わり」など、草木塔の精神と木製品を組み合わせた独自の木育教育についても可能性があると考えている。

③他地域への波及効果

「挑戦と創造する米沢の木製品製造業」

本市内の木製品製造企業は高度な木工技術を有し、既に、近隣市町からも木製品製作の引合を受けていることから、本取組を拡大していくことにより、他市町への木製品を通じた環境意識の高揚等の波及効果が期待できる。



4 歴史資源の活用

「草木塔発祥の地『米沢』から世界に自然環境保全意識を発信する」

①地域資源の活用

「草木塔は現代に通じる SDGs の歴史資源」

草木塔は本市が発祥の地であり、自然との共生、環境保全といった現代に通じる歴史資源である。上杉鷹山の時代に米沢藩の江戸屋敷が焼失し、その再建の材木として領内の塩地平の山林が伐り出され、また、桐町・立町等 120 戸を焼いた大火でも材木が伐り倒されたことが、鷹山が草木塔を建てるきっかけになったと考えられている。

こうした自然を慈しむ米沢・置賜地域独特の精神性を今に伝えていくため、小中学校教育や社会教育等の地域教材として活用するとともに、江戸時代に建立された最古の草木塔から現代の草木塔までを地図を片手に巡り、散策を兼ねた自然たっぷりのエコツアーとして開催するなど、観光面での活用も考えていく。さらに、草木塔の保全・継承に関わる活動の一環として、フォーラム「草木塔との語らい」を開催し、本市内外の多くの人達に草木塔の精神と魅力を発信する。

②経済性、持続可能性の確保、実現可能性

「語り伝えられてきた草木塔を市民皆の手で保全と活用へ」

本市内の草木塔は市指定文化財となっており、地域住民や行政等による保存に向けた活動が行われているほか、最古の草木塔が建立されている市内田沢地区では、草木塔を題材とした社会教育事業が行われるなど、活用に向けた下地ができていることから実現性は高いと考えている。

③他地域への波及効果

「今こそ連携して草木塔を自然環境保全意識の高揚に生かす」

草木塔は、本市をはじめとした置賜地域に数多く建立されていることが特徴であり、そうした市町と連携しながら自然環境保全に向けた活動展開等の波及効果が期待できる。

5 里山資源の活用

「本市のシンボル『斜平山※（なでらやま）』でSDGsを実践する」

※斜平山とは？

本市の南西部にある愛宕山、笹野山の二つの山で構成される。最も高い標高は634mで、上杉鷹山が雨乞をした祈念碑や愛宕神社が建つ。



①地域資源の活用

「未来への種を撒く『ようざん桜の杜』活動」

本市の斜平山は、米沢のシンボリックな山として市民に慕われており、特に、愛宕神社の例祭日の8月1日には、多くの市民が愛宕山に登り（民衆登山）参拝するほか、麓の笹野観音堂（県指定文化財）では、1月17日に笹野観音十七堂祭が開かれ、無病息災を祈願した火渡りの荒行が行われている。また、愛宕山の麓の里山は、上杉鷹山が雨乞い祈願や籍田の礼（※）を行った地であり上杉家と所縁の深い場所となっている。

このような歴史的背景を生かし、廃校となった小学校の敷地等に、2018年度から桜の苗木を植樹し、市民や本市を訪れた人達が、未来にわたり、楽しみ憩うことができる桜の名所（ようざん桜の杜）となるよう活動を開始した。加えて、麓の笹野地区で代々受け継がれ、千数百年の歴史を持つと伝えられている「笹野一刀彫」は、本市の伝統工芸品となっている。

斜平山一帯の自然環境を保全しつつ、新たな観光資源として更に活用するため、ようざん桜の杜の取組を市民皆の手で継続・拡大していく。また、斜平山の麓には、眺望の素晴らしい自然の中で、市民が集い・憩える場、楽しみながら健康づくりができる場として整備した大森山森林公園や、森林体験交流センターを活用し、市民の健康づくりに向けた新たなハイキング&トレッキングコースの開発と案内板の整備を進めるなど、過疎化が進む里山に人を呼び込む仕掛け作りをしていく。



※籍田の礼（せきでんのれい）とは？

鷹山や家臣一同が神社に参拝した後、洪水や干ばつで荒れた田の土に数回ずつ鍬（すき）入れして、農業の大切さを領民に知らせた。

②経済性、持続可能性の確保、実現可能性


「市民皆の手で斜平山の自然環境を守り生かしていく」

桜の植樹に協力していただく「ようざん桜の杜協議会」や自然環境を保全・活用することを目的とした住民組織もできていることから、実現性は高いと考えている。さらに、「笹野一刀彫」に携わる若い後継者も育ってきており、伝統工芸品の確実な伝承も期待できる。

③他地域への波及効果

「置賜の桜の名所を結ぶ『置賜さくら回廊』の起点」

本市を中心とした置賜地域には、桜の名所（日本のさくら名所100選「烏帽子山千本桜」、国指定「伊佐沢の久保桜」「草岡の大明神桜」、県指定「薬師

	<p>桜」を始めとする樹齢 1200 年余りの古木や名木、巨木といった古典桜の名所が 20 箇所ほど) が点在していることから、本市の桜を起点に、それらをつないだ桜巡りの観光ツアーの展開等の波及効果が期待できる。</p>
<p>(2) 想定される地域の環境・経済・社会への効果 (指標)</p>	<p>上記 (1) の「活用したい (している) 地域資源」ごとに記載。</p> <p>1 家畜排せつ物資源 「米沢牛等の畜産振興と環境保全の両立が図られる。」</p> <p>①環境面への効果 家畜排せつ物を堆肥として農地へ還元するとともに、バイオガス発電プラントで生み出された電力、排熱を利用することにより、二酸化炭素の排出削減に貢献できる。 指標：バイオガス発電容量 (発電容量 370 k W)</p> <p>②経済面への効果 家畜排せつ物の減少による畜産農家の労力軽減につながるほか、液肥等の販売による地産地消の促進が図られる。 指標：家畜排せつ物のプラントへの搬出農家数 (2020 年度 2 戸)</p> <p>③社会面への効果 資源循環型の農業実践者の増加が期待できる。 指標：耕畜連携 (資源循環型) 実践者数 (2019 年度 73 件)</p> <p>2 森林資源 その 1 (やまが炭) 「過疎で悩む中山間地の活性化と理想的な森林の好循環が図られる。」</p> <p>①環境面への効果 本市の森林資源の地域内循環が促進されるとともに、森林の手入れ等、森林環境の保全が図られる。 指標：林業経営体数の維持 (2015 年 49 経営体 農林業センサス)</p> <p>②経済面への効果 地元産木材の利活用が進むことにより、林業の成長産業化 (雇用の創出、儲かる林業) が促進される。 指標：やまが炭のふるさと納税返礼品数の増加 (2020 年 36 件)</p> <p>③社会面への効果 炭焼き窯で人が活動することにより、過疎化や少子高齢化が特に進行する中山間地域の活性化に寄与できる。 指標：林業従事者数の維持 (2015 年 60 人 農林業センサス)</p> <p>3 森林資源 その 2 (米モック (子供おもちゃ) 産業) 「米沢の豊かな森林資源の保全と林業の成長産業化が促進される。」</p> <p>①環境面への効果 本市の森林資源における立木の種類や生育状況等の解析調査が更に進むことにより、森林環境保全計画の推進に寄与できる。 指標：林業経営体数の維持 (2015 年 49 経営体 農林業センサス)</p> <p>②経済面への効果 地元産木材の利活用が進むことにより、林業の成長産業化 (雇用の創出、儲かる林業) が促進される。 指標：森林資源を活用した素材生産量の増加 (2015 年 7,009 m³)</p> <p>③社会面への効果 本市の木製品の活用により、子どもたちや市民に、地域の森林づくりの大切さ、環境に対する認識等を深める機会を与えられる。</p> 

指標：市民の暮らしの満足度で環境を大事だと思う市民の割合の向上
(2019年度 市民 19.7%、大学生 31.4%、高校生 36.5%)

4 歴史資源

「草木塔の活用による自然環境保全意識の高揚と観光振興が図られる。」

①環境面への効果

本市民の自然環境保全意識やその活動が高まることが期待できる。

指標：地球環境問題に地域から貢献していると思う市民の割合
(2014年度 49% (肯定的割合) 環境基本計画市民アンケート)

②経済面への効果

草木塔を活用した新たな観光振興により交流人口が増加し、地域活性化につながることを期待できる。

指標：観光入込客数の増加 (2019年度 4,476,749人)

③社会面への効果

自然環境保全活動を通して市民のコミュニティの促進等が期待される。

指標：草木塔の語らい、草木塔祭 (田沢コミュニティセンター) の参加者数 (2019年度 130人)

5 里山資源

「市民の自然環境保全活動が活発になるほか、桜を生かした観光振興が図られる。」

①環境面への効果

桜の植樹、松枯れの伐採、下草刈り、ブナの害虫調査等の住民の活発な活動が行われ、自然環境の保全が図られる

指標：ようざん桜の杜への桜の苗木の植樹本数。(2020年度 20本)

②経済面への効果

新たな観光資源として活用することにより交流人口が拡大し、地域活性化につながることを期待される。

指標：観光入込客数の増加 (2019年度 4,476,749人)

③社会面への効果

環境保全活動を通して市民のコミュニティが促進されるほか、民衆登山、ハイキング&トレッキングによる市民の健康づくりが図られる。

指標：愛宕山民衆登山参加者数 (4:00~6:00の間) (2019年 516人)

3. 実施体制の適正性

(1) 取組状況、進捗状況と今後のスケジュール (地域コンソーシアムの有無等)

<取組状況、進捗状況>

1 2021年度SDGs未来都市(内閣府)へ申請予定

【モデル事業名】

「鷹山公の教えを未来へ デジタル人財育成を柱とした持続可能なまちづくり」

【取組内容】

米沢藩9代藩主の上杉鷹山は、生涯をかけて藩政改革を成功に導いた、本市の精神的支柱ともいえる名君である。人口減少に加えてコロナ禍で疲弊した地域を再興し、未来に向けて持続可能なものとしていくため、現代に通ずる鷹山公の思想を基に、ICTを活用した人材育成を柱に据え、経済・社会・環境の好循環を図る。

【地域循環共生圏に関連する取組】

①「草木塔発祥の地」からの自然環境保全意識の発信

②ゼロカーボンシティの実現に向けた「ようざん桜の杜」への植樹と木材の循環利用の拡大

③米沢独自の食文化「かてもの」を活用した食育の推進と地産地消の取組

	<p>2 置賜定住自立圏共生ビジョン（2018 年度策定、中心市：米沢市、連携市町：長井市、南陽市、高島町、川西町、小国町、白鷹町、飯豊町）の取組</p> <p>○圏域の将来像「つながる置賜 ともに明るい未来へ」</p> <p>○地域循環共生圏に関連する取組】</p> <p>①環境保全及び循環型社会構築事業</p> <p>②再生可能エネルギーの利用促進</p> <p>③森林・里山対策に関する検討</p> <p>【今後の主なスケジュール】</p> <p>令和3年度</p> <p>○目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域資源を活用した持続可能な社会の実現を目的とする（仮称）米沢市地域循環共生圏推進協議会を設立し、内外の事例をもとにした勉強会を行い、民間活力による新規事業の創出に向けた仕組みや事業採算性などを検討する。 <p>4月 庁内説明、ステークホルダーの調整（企業等への説明）</p> <p>6月 （仮称）米沢市地域循環共生圏推進協議会の設立</p> <p>7月 ワークショップ（課題の把握、目標設定等）</p> <p>8月 実践に向けた勉強会、事業の検討等</p> <p>～</p> <p>11月 環境省への中間報告</p> <p>2月 まとめ、環境省への成果報告</p> <p>3月 次年度の取組検討</p> <p>令和4、5年度</p> <p>令和3年度の取組をフィードバックし、具体的な事業の検討・実施</p> <p>中期計画（令和6～7年度）</p> <p>具体的な事業の評価と検証、そして新たな課題解決に向けた具体的な事業を再検討する。</p>
<p>(2) 実施体制</p>	<p>現時点で想定しているステークホルダーは以下のとおりであるが、勉強会や事業検討の過程で、新たな関係者の協力が必要となった場合には、それらに参画をお願いするなど、より多くの人との共有化を柔軟に進めていく。</p> <p>①プラットフォーム構築・全体調整・事務局</p> <p>米沢市</p> <p>②市民活動等</p> <p>米沢市地区委員会、各地区コミュニティセンター、ようざん桜の杜協議会、NPO 法人斜平山保生活用連絡協議会、米沢市衛生組合連合会</p> <p>③産業活動</p> <p>山形おきたま農業協同組合、米沢地方森林組合、米沢商工会議所、米沢観光コンベンション協会、リアクトバイオガス(株)、畜産関係者、民間企業</p> <p>④高等教育機関</p> <p>山形大学工学部、米沢栄養大学、米沢女子短期大学</p> <p>⑤金融機関 山形銀行、米沢信用金庫 等</p> <p>⑥県 山形県置賜総合支庁保健福祉環境部</p>

【注1】記載する文字については、11pt 以上とすること。

【注2】事業実施計画書は、A4 サイズで、10 ページ程度までとすること。

【注3】記入欄の「※」の記述は削除して構いません。